

45【街の散策からの気づき発見】

街の散策・去年今年(こぞことし)

会員 K.T.

毎日に神社コースをグルリと自転車で「2025年散策治め」、各々正月を迎える準備が整い、境内はすがすがしい静けさがあった。大晦日は巣ごもり、お酒をいただきながらTV三昧で、行く年を見送り、新しい年を迎えた。元日午後、「2026年散策始め」は神社コースを自転車で散策、多くの初詣の人々の賑わいは正月の風景だ。早々に、散策を切り上げ、正月のつれづれの時間で、古典を紐どいていると、先人たちの去年今年への思いの歌を見つけた。

「新たらしき年の始めの初春の 今日降る雪のいや重け寿詞

(大伴家持 『萬葉集』卷二十 四五一六)

かぞふればとまらぬものをとしいひて今年はいたく老いぞしにける

(詠み人しらず 古今和歌集 卷 17)

かぞふれば年の残りもなかりけり 老いぬるばかりかなしきはなし

(和泉式部・新古今和歌集 卷6)

去年今年 貫く棒の 如きもの

(高浜虚子・昭和 25 年(1950)の作品)



東八幡神社



元日



八坂神社



元日



日枝神社



元日



春日部八幡神社



元日

萬葉集は奈良時代の8世紀後半に成立、家持は新年の喜びを詠う。古今和歌集は平安時代、905年に日本初の勅撰和歌集として成立、詠み人しらずの作者は、歳をとった実感を詠っている。新古今和歌集は鎌倉時代 1205年に成立、式部は平安時代の中期の人で「年の暮に身の老いぬることを嘆きてよみ侍りける」と詞書で記している。虚子の句は、昭和 25 年(1950)新春のラジオ放送で、虚子76歳のときの句、句意は「としに関係なく、自分の新年は、生きていく限り、変わらない」という。明治・大正・昭和の激動の時代を生きた虚子の気骨を感じる。古典を紐とくと、日本の歴史の厚さを思う。萬葉の時代、大陸から伝わった漢字の「音」や「訓」を使って、「万葉仮名」で日本の言葉を表現した。894年遣唐使が廃止され、国風文化が発展した平安時代に漢字から「ひらがな」や「カタカナ」が創り出され、より豊かな日本の言葉を表現できるようになった。5・7・5・7・7の三十一音の和歌の定型が確立し、和歌から連歌が派生、その後、連歌から俳諧の連歌・俳諧が派生、江戸時代、芭蕉によって俳諧は文芸として完成した。それから約200年後の明治時代(1868~1912)正岡子規(1867~1902)によって近代俳句が完成、虚子(1874~1959)はその後継者となり、今日の近代俳句を発展させた。言葉で思いをつづる文化は大陸文化から日本独自の詩化を求めた平安時代の歌人、紀貫之は、『古今和歌集』の冒頭に、次のように記している。「やまとうたは、人のこころを種として、よろづの言の葉とぞなれりける、世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひいだせるなり。花に鳴く鶯、水にすむかはづのこえをきけば、生きとし生けるもの、いづれか歌をよまざりける。力をもいれずして、天地をうごかし、目に見えぬ鬼神をもあはれとおもはせ、男女のなかをもやはらげ、たけきもののふの心をもなぐさむるは歌なり。」

「初詣」に神社へ参拝する多くの人々の姿があった。私どもは、古からの文化を DNA のように身に着けているようだ。初詣は「新しい年の穀物の実りをもたらし、子孫の繁栄を見守ってくれる年神(としがみ)さまを、お迎えする行事。お正月は、「年の初め」「年があらたまる」という意味があり、「新魂(あらたま)の年のはじめ」という、「たましいが若返り、新しくなる」一年のはじめの月、という意味である。新しい年を迎、全てが新しく始まる節目として、古からお正月行事はある。「初詣」の風景に、日本の文化が続いていることを思う。